



成隣だより

平成29年6月30日

第4号

昭島市立成隣小学校
校長 加賀田 真理

「河豚の話」

副校長 眞砂野 裕

問：「河豚」ある魚の名前です。

これは「ふぐ」と読みますね。敵に襲われそうになると体を力一杯ふくらませて相手をおどかすことで有名な河豚は、食べるとおいしい高級魚としても人気のある魚です。そして、もう一つ。猛毒があることでもよく知られた魚です。この河豚に関して、こんな話を聞いたことがあります。



・・・昔々、まだ人々が河豚の毒のことをよく知らなかった時代。ある海岸で一匹の河豚が釣れました。見たこともない魚をみんなが怖がっている中、一人の若者がそれを食べると言い出したそうです。周囲が止めるのも聞かず若者はその魚を食べて猛烈な腹痛を起こします。「ばかだなあ」と揶揄される中で、若者はたった一言「あの目玉を食べたのがいけなかった。」と言い残したそうです。そしてまた、別の海岸で別の若者が河豚を食べ、そしてやはり一言「目玉もいけないが、あの内臓がいけなかった！」と言い残したそうです。こうした多くの人々による歴史が繰り返され、私たちは現在安全に河豚を調理する方法を得ることができているのです。

失敗もあったし、合理的ではなかったかもしれませんが、しかし「やってみよう！」
「(知識を) つないでいこう！」という若者たちがいなければ、河豚の調理方法はわからなかったのです。

多くの者が自らの意志で参加し、自らの考えを表現し、対話と実践を繰り返して一つの結果を残していくこと、これが「文化を創る」ということなのだそうです。

新しい学習指導要領が示された今、学力の定義も大きく変わろうとしています。固有の知識を獲得することが学力の主軸だった時代から、「主体的・対話的で深い学び」が求められる時代となりました。その中で、本校が目指すのは、教わるのが上手な児童ではなく、『学ぶことが上手な児童』です。先生が教える内容を正確に知識として身に付けることも大切ですが、これからは自ら学ぶ、自ら考える、自ら表現する、そして仲間と協働して解決方法を考え実践していくことにより重点を置く時代となります。子供たちが成長していくにしたがって、課題解決を共にする仲間の輪も広がっていくことでしょう。いつか出会うその仲間は、外国の方かもしれないし、障害をもった方かもしれません。小学校の教育活動はその土台となるのです。もちろん、その土台づくりには日々の授業改善が不可欠です。教員一同、力を合わせて、目の前の子供たちが社会に巣立つ時代を見据えた教育を展開していきます。